

「自分探しの旅へのティク・オフ」

園長 高杉美稚子

4 月、時には、泣き顔だった園児も、顔をおおった小さな手の 5 本のかわいい指一本一本の隙間から、笑顔がほころび、そこから、随分と視野が広がり、お友達と人間関係をどう築いていってよいか理解出来なかった子ども達も、少しずつ上手にアンテナが伸ばせるようにもなりました。幼児期はまだ、そのアンテナの受け止め方を学んでいる発達段階で、友達同志の葛藤も多い時期であり、大変な時期ではありますが、それゆえ、子ども達が一番成長する私の一番大好きな時です。そんな大好きな子ども達とも、最後の学期、この 3 月でお別れする年長さんの事を思うと今から寂しい限りですね。

年度で言えば最後の学期そして年の初めでいえば新年。この終わりと、最初が同時にある学期がこの後期後半です。「はじめが肝心」、「終わりよければすべてよし」という両方の言葉を思い出せばこの学期がいかに大事であるかと思えます。しかし、「物事は九分を持って半ばとする」という言葉を思い出せば、その中間も大切なわけで、力を抜けるところなどはないのですが・・・特に、最後の学期、子ども達と一緒に歩みながら、精一杯「子ども達の心の残る原風景の為に」力を尽くしたいと思えます。

さて、新年の職員会議では毎年、一人一人年頭の初心挨拶をしてもらいます。今年も、それぞれに自分で感じる、目標の明確化が出来たようです。後はこの目標を実行可能なより具体的な行動に置き換える作業です。その小さな行動をひとつずつ、クリアできたらいつのまにか目標はかないます。

今年の私の年頭の挨拶は「不調和というものは、調和に転化するひとつの要素である。」ということでした。かの有名な本田宗一郎の言葉です。

幼稚園勤務を始めて今年で丸 25 年、園長になって 20 年が経とうとしています。最初の 10 年は自分が何者であるか、どこへ行こうとしているか、自分の欠点は何なのかさえもわかっていなかったがむしゃらに走っていた 10 年であった気がします。そしてその後の 10 年は教育学だけではなく心理学とも出会い、その他のたくさんの分野の方のご指導で、自分の欠点や自分が何者であるかに気づいて行った 10 年であったと思います。

自分の姿や本当の力がどれほどのことであるかに気づいたあとのそれからの 5 年は、この欠点や不調和の部分の何とかなしようとあせって走ったり、力んだり、ときに立ち止まり、歩いたり、自己内対話を楽しみながら、同時に苦しみながら、自分の居場所やあるべき姿を求めて模索しながらあがいていた時期であったと感じています。

そして 26 年目がやってきます。もうこれ以上あがいても、欠点を直せる年齢ではなくなってきました。日ごとに体力の衰えも感じずには入れられない年齢です。でも、今、こ

の年齢になって本当に感じるのは、人間が美や魅力を感じるのは、必ずしも左右対称の均衡が取れたものや完全無欠のものばかりではないということです。

人はみな完璧ではありません。なにびとにも必ず欠点があります。でも欠点そのものが魅力になる時もあります。欠点があるからこそ、味がある、人間はどこか抜けたところがないと面白くもないものと思うのです。その足りないところをひとつの魅力にまで高めることが出来たら、本物であるし、夫婦関係も含めて相手の欠点こそが大好きになれば、こんな深い結びつきの人間関係はないと私は思うのです。

不調和や遊びの部分というのは結局のところゆとりではないでしょうか。創造性や、人間性、根性といったものは、むしろ不調和の中で育っていくのです。この事が自分の中にしっくりくるということは、これから、確実にやってくる「死に向かっていかに生きるか」という答えが私の中に見出せるような気がしています。またそれは精神力も体力も確実に衰えてくる、すなわち、自分の中の不調和が増えてくる、「老い」も確実に受け入れることが出来ることにつながるのではないかと感じています。

ではその目標を達成に近づける為に私の実現可能な小さな行動は、物事の両面を同時に見る事が出来るようにすることです。具体的にわかりやすい例で言うならば、年末に桃井かおりさんの対談番組の中で彼女はあの独特のけだるそうな言い回しでこう言っていました。「この年になって胸が下がってきたけれど、だから、シャツのボタンがひとつ多く開けられるようになってとっても素敵に着こなしが出来るようになったの」

オードリー・ヘップバーンの顔のしわが晩年美しいといわれましたが、外見の美しさではなく、心持ちこそが老いるごとに魅力を増していけたらこんな幸せなことはないように思います。またその心の美しさ、成熟は表情にも表れ、結果として外見が魅力的になる事は更に素敵なことですね。

人づきあいにおいて 40 歳までは顔で選ぶな、40 歳を過ぎたら顔で選べ、40 歳過ぎたら顔が履歴書といわれるのも、その人の内面が外に現れるからでしょう。本当に内面が魅力的な方は、表情が生き生きとして美しいし、男の方でも風格がただよっています。

物事には見方を変えれば、必ず良い面と、悪い面があります。その両面を同時に人にも、自分にも、事象に対しても見る事が出来るようになればどんなに楽に生きれるかと思うのです。そして、それは新しい気づきを与えてくれるでしょう。調和と不調和の双方が混在する、そしてそのことが魅力になっている人間、そしてそんなこれからの人生でありたいと思った年頭でした。

そして、幼稚園の教育では、今年度も、更に、ドリカムタイム、げんきモリモリタイムに代表されるように、「時代を超えて、真に生きる力を身につけること」が出来る様に教育のあり方に手を加えた年であります。

旧職員や、卒園生の保護者の方に、「吉塚幼稚園は常に進化し動いている」と言って頂くゆえんですが、園に、子ども達がこう育ってほしいという「教育方針」があるように、保護者の方にも、我が子にこんな大人になってほしいという願いがそれぞれおありになるでしょう。

こんな子に育ってほしいと願い、教育し、子育てする時、子ども達がどんな時代に生きていくのか、という事をその回りにいる大人は、ある程度予測して、教育にあたる義務があると私は考えます。子ども達は、今を生きるのではなく、20年後を生きていく子ども達なのですから。

保護者の皆さん、さて、子ども達が成人する、15年後はどんな時代がやってくるのでしょうか。もちろん、人は、いつの時代にも、順応してきましたので、これからもおそらく、少子高齢化対策、税制、福祉の対応、エネルギー、環境関連技術の開発、医療改革、教育改革等、あらゆる知恵をしばって乗り越えていくことでしょう。

では、その中で、どう生きていってほしいのか、どうすれば、生きていける大人に育っていくのか、大きな視野に立って子育てをしなければと思います。近年、あまりにも、目の前の事象にとらわれて、子育ての視野が狭くなっている、そこで、親自身も、いえ親のほうが疲れている。その体験を通して、子どもが何を気付き、どう成長しようとしているのか、見極めずに、前に、前に経験の場をつみ取ってしまっている、そんな場面が多いような気がしてなりません。新年という一つの区切り目にあたり、私達も含めて、今一度、子育てを振り替える良い機会と致しましょう

ある本にこんな言葉が書いてありました。

――「旅」と「旅行」の違いについて――

他人の経験をなぞるのが旅行で、未知のものを見つけるのが旅。

快適、安全、能率を追求するのが旅行で、骨折りをいわず偶然性を楽しむのが旅。車のガラス窓の向こうに風景が通り過ぎるのが旅行で、風景の中に肌身をさらすのが旅。金で買うのが旅行で、金で買えないのが旅。

私は、この文章を読んで、「人間の生き方」について考えさせられました。まさに、人生を旅行ではなく「旅」のごとく生きる事が人としての人生の生きざまではないか...と。幼い一人一人の子ども達も、これから長い人生の旅たちを迎えるわけですが、良い旅のためには、良い旅仕度が不可欠のように、子ども達の豊かな実りある人生の旅仕度の期間が、今まさに、幼稚園の時代ではなからうかと思えます。そして、全ての子ども達が旅仕度を終えてから、旅立つのではなく、すでに、その子どもなりの旅は始まっていると考えなくてはなりません。

個性の違う子ども達にとってそれぞれの旅の仕度は違うでしょう。違うから又おもしろくもあるのです。ですから、集団生活に入れて、親自身があせる事が一番マイナスです。色々な事を子どもの為に考え、その発達の為の環境作り、雰囲気作りは、お母さん、お

父さんの役目です。でも、子育ての仕方に正解はありません。色々な子育てがあって当然という心持ちで、楽しみながら育児をしていけたら、親も子もとても幸福な事だと思います。

そのそれぞれの個性や育ちの姿を大切にしながらも、集団教育において等しく仕度しなければならないものもあります。それは、「自立」と「思いやり」の心です。これは、まさに幼児期にしか育まれない心情でもあります。そして、現在の核家族化、少子化傾向の中では、集団教育の中でこそ培う事が出来る心情です。いくつになっても、回りの人的、物的環境を考え、しっかりと自立し、いかに自己教育出来る「自分育て」が出来るかが大切だと考えます。親子共に自立への道「自分探しの旅」は今始まったばかりです。これからも子育てと共に「自分育て」も頑張りましょう。

「子ども達にとっての本当の幸せとはなにか」「幼児のその年齢に不可欠な事は何か」を常に見すえながら、子ども達が今も素晴らしく、未来も素晴らしい「人生の旅」をどうしたら持つ事が出来るかを、保護者の方と手を取りあって、真剣に今年度最後の学期も共に考えていきたいと考えております。人間の存在価値といった視点から、又、共に子育ての大切さと楽しさを感じながら。

本園は、今年度も「幼児期は、体験する事で学び、行動する事で、思考する」という事を前提に、「遊びの幼稚園」でもなく「勉強の幼稚園」でもない、「その年齢に必要な直接体験を与え、がんばれる心と体を培う幼稚園」である事に務めてきました。

それは、「幼児期に感動を持って身近な環境と触れあう直接体験を十分もつ事こそが、幼児の知的好奇心を誘発し、やがて感受性豊かな、思考力とやる気のある子どもをそだてる。」「体験を通して、洞察力、先見力、判断力、実行力と心優しい心情や地球全体を愛する広い人間愛を持ち、将来を予測し情報を分析する力を育てる」ことが21世紀をしなやかに生抜いていく為にそして、どんな事にもしなやかに対応できる人間になる為に、必要と考えるからです。

子ども達は、ご家庭での温かさと本園の教育の中で、それぞれに豊かな成長をとげてくれました。あの「雪折れしないという柳」のように、強くしなやかに育てと願いながら、今年度もあとわずか、子ども達が残り少ない日々を充実して過ごしてくれる事を願ってやみません。

最後に、卒園児の皆さん、たくさんの思い出を今年もありがとう。この幼稚園からいつまでも、いつまでも応援しています。巣立っていく園児達だけではなく、これから学童期を経てやがて大人になっていく園児を見守る、お父さん、お母さんに対しても共に、どこにいても最強の応援団であり続けたいと願っています。いつまでも、この幼稚園から大きなエールを送り続けています。翼が折れそうになったらこの吉塚幼稚園の事を思い出してください。そして、いつでも私達に会いに、ぞうさんの待っている玄関をくぐりにきてください。又、ここでお会いしましょう。